

## 答辞

皆様、本日は私たちの卒業式にご臨席賜り、誠にありがとうございます。卒業生一同を代表して、この場をお借りし、心より感謝申し上げます。

私たちの代の指針の根幹には、常に「根拠なき自信」「根拠なき挑戦」がありました。

新型コロナウイルスの流行に伴い2020年以降、規制強化、規模縮小等の措置が行われてきた修猷二大行事、「大運動会」と「大文化祭」。私たちが最高学年として臨んだ2024年にはほぼコロナ禍以前と同じ条件での開催が許されました。

とはいえ、私たちは実際に以前の二大行事を経験したことがありません。通常であれば、先輩方から受け継いだ伝統を守り、同じ水準を目指すのが精一杯だったでしょう。

しかし、私たちが掲げた第2回大運動会のテーマは「凌雲」——雲を凌ぐ。「俺たちにとっての目標は完全な状態を取り戻すことじゃない。これまでの素晴らしいものをも超えなければならない！」それを成し遂げる確かな根拠は無論ありませんでした。しかし大運動会運営長の小田は常に「大運動会やっちゃうよ」の精神で突き進み、周りもその流れに乗り、素晴らしい大運動会を創り上げることができました。まさに根拠なき挑戦の好例であつたと思います。

私は「根拠なき自信」こそ、成長の原動力だと思います。

ある脳科学者の方の話にこんなものがあります。「赤ん坊ははじめから立つことはできないし、立つことのできる根拠もない。ただ、根拠なき自信だけを頼りに、幾度とない挑戦を重ね、立てるようになるのだ。」

「根拠なき自信」の重要性を的確に指摘されている様に感じます。

私たちは生まれたばかりの頃から今まで、意識することは無くとも、何度も根拠なき挑戦により成長してきたと言えるでしょう。今、私たちが出来ること——食べること、歩く

こと、話すこと。教え出したらきりはありませんが、それらのほとんど全ては後天的に得たものです。

これからも私たちは多くの能力を身につけようとするはずですが、そのときにはきつと「根拠なき自信」が効果を発揮することでしょう。

今日、この世界は多くの課題を抱えています。持続可能な開発目標、SDGsが国連総会で採択され、世間から注目を集めるようになってからはや十年。当初の到達期限であった2030年まであと5年に迫っています。しかしながら、目標の達成はおろか、新型コロナウイルス、世界各地で激化する戦争や紛争などの影響により、状況は悪化しているとも言われています。私たちはこうした問題にどう立ち向かうのでしょうか。「どうせ一人では何もできないから」「自分は現状に満足しているから」と見て見ぬふりをするのでしょうか。きつとそうではないと思います。不可能に見えることにも、根拠なき自信で突き進む。「世のため人のため」修猷に受け継がれるこの精神で私たちは世界に目を向け、課題解決に取り組みなければなりません。

私たちは今日でこの修猷を卒業します。一人一人がこの三年の修猷生活で教えきれないほどの根拠なき挑戦をしてきたことでしょう。失敗も成功もあったはずですが、失敗の方が多かったかもしれません。ですが、その全てが私たちを成長させたということは疑いのないことでしょう。予餞会では多くの三年生が挑戦をテーマに語り、その重要性を訴えました。在校生の皆さん、私たちの様に、いや私たちを超えるような挑戦を続けて下さい。それが私たち卒業生の願いです。

しかし、私たちがしてきた挑戦もきつと一人では成し得なかった。周りの方々の協力が不可欠でありました。家族、修猷の先生方、そして隣に座る友人たち、私たちを結びつけた修猷という場所。数えられないほど多くの支えがあったからこそ、私たちは挑戦することができたのです。これまで私たちの挑戦を支えてくれた全ての方々に心より感謝申し上げます。

そしてその感謝の気持ちを、これからも根拠なき挑戦を続けて行くことで、形にさせていただきます。

修猷生。私たちに何か自信があるとすれば、それは根拠なき自信から生まれたもの。失う勇気を持って何事にも恐れない、「根拠なき挑戦」を続けよう。

以上、答辞と致します。

令和七年 三月一日 卒業生代表 樋口 士裕